慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 経済的史観論の価値（一） |
| Sub Title | |
| Author | 野村, 兼太郎 |
| Publisher | 慶應義塾理財学会 |
| Publication year | 1919 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.13, No.5 (1919. 5) ,p.639(93)- 649(103) |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 雑録 |
| Genre | Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19190501-0093 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

（廣告主へ御注文の節は三田學會雜誌廣告に依る旨御附記を願ひ度し）

英國 マスター・オブ・アーツ 見本 パチラル・オブ・コンマーシャル・レレー

# 增訂英和對譯商用文

中川遠藤五郎君著

菊判洋裝全一冊 正價參圓五拾錢 總紙數七百餘頁 小包料金十八錢

英語商書の王朝

正第六版

出つ

世界的大戰爭漸く終りを告げて平和の商戰更に激烈ならんとす。此秋に際りて世界の商戰場裡に馳驅して、變化測られざるの活機を制し、必勝の利を收めんと欲せば須らく商用通信文に練達せざるべからず。通信文は商戰に於ける唯一の武器にして資本の集散も信用の厚薄も其利鈍如何によりて決す。著者曩に本書を公にするや最新なる書法と歐米に於ける豐富なる蘊蓄とは以て從來嘗て見ざる好書としず商業界は勿論各商業專門學校の利用する所となり版を重ぬる事五度今回更に訂正第六版を出す。平和の經濟戰に必勝を期せんとす。るの士は必ず本書を座右に供へざるべからず。

發兌元 東京市日本橋區十軒店町 華房

振替東京百七 電話本局千壹



## 經濟的史觀論の價値（一）

野村兼太郎

### 一

人類を他の動物より區別するに歷史の有無を以つてするは、素より極めて非科學的の論斷なりと雖も、實際的方面より見れば、又一の理由をも含まざるものにあらず。勿論歷史を定義して嘗つて起りたる事實、"was geschieht und was geschehen ist" の記錄なりと解せば、他の動物は論ずる迄もなく、植物鑛物の如きものと雖も、苟も時間的經過を有するものは、すべて各々其の歷史を有すべき理なり。(1) 然るにこゝに人類以外の自然的事物に歷史なしと解するは、單に研究上の興味と實際上の必要とよりの假定に過ぎずして、何等根本的理由あるにあらざるべし。かの歷史に對して新しき解釋を企てたるウィンデルバンド、リッケルト等の西南獨逸學派の論ずる所の如き、各科學の目指す所の認識目的に依りて、自然科學對歷史科學若しくは文化科學の區別をなしたるは、勿論方法論上正當なる論理的歸結なるべけれども、(2) 直ちに是を以つて科學の本質的區別となすには、尙ほ未だ若干の疑問なきにあらず。要之如何なる自然物と雖も歷史を有せざるものはなし。然乍ら假令すべてのものが歷史を有するにもせよ、數十年數百年を經るも殆ど何等見る可き變化をも生ぜざるもの、若しくは變化はすれども常に略々同一の變化を繰返すに過ぎざるもの、斯如きものゝ記錄に對して、吾人は何等の興味をも感ずることを得ざるべし。斯如く單なる實際的の便宜上より、歷

史を以つて人類特有のものとなし、人類及び人類の干與せる事實の記錄に局限するも敢て不可なかるべしと信ず。[3]：

然らば歴史とは如何なるものを云ふか。すでに述べたるが如く過去に起りたる事實の記錄なる以上、(一)時間的に經過せること、(二)事實的存在なりしこと、及び(三)個別的に記錄さるゝことを必要とするは論なし。されど以上の三要件のみにては未だ歴史的事實として充分なりと云ふことを得ず。例へばある母が某と云ふ子を生めりと云ふが如きは、過去に於けるある人類の事實には相違なけれども、歴史的事實にはあらず。或は又ゲーテが一七八〇年に呼鈴と鍵とを、更に同年二月二十二日に書翰函を調製させしことは、今日殘存せる鍵匠の受取證に依りて、確實なる過去の事實なることを證明されたりとするも、斯如きは尙ほ歴史的事實にあらずして、單なる事實の記錄に過ぎず。[4]即ち其の事實は何等原理的に選擇せられたるものにてもなく、且亦文化價値に對して何等干與する所なきが故に、如何なる選擇目的 Auswahlzweck にも叶はざるものなるが故なり。換言せば文化價値に干與する所なき事實は、歴史的事實と云ふことを得ざるなり。

然らば斯如き事實が如何なる意味に於てのみ歴史的に價値ありとせらるゝや。斯如き論理の當然の結果として、常に其の前提に進化若しくは發達の觀念を豫想せざるを得ず。換言すれば人生は一の Idee に對する過程として、是に對して向上せんとする點に於てのみ價値を有するものなり。即(四)文化價値ある一の Idee に向つて精進努力する人間の過程——文化に對して貢獻ありし事實こそ歴史的事實なり。苟も歴史的事實たらんには、以上述べたるが如き四つの要件を具備せざるべからず。斯如き理想論の假定に對する反對論は容易に是を想像し得、尙ほ又これ等の點に關して論すべきこと甚だ多けれども、本論文の範圍外に逸することの餘りに甚だしきを恐れて暫く是を論ぜず、唯人類の社會的變遷——少くとも原始的民族の時代より今日の現代文明人の域に達したる過程を假りに稱して進化[5]と云ふを許容し得れば足れり。斯くして更に論歩を進めて、然らばかゝる文化を形成する人類進化の過程は如何なるものを其の根本的動機となすや。換言すれば歴史の根本となるべき動機は如何なるものなりやに就て論ぜんと欲す。

歴史の對象となるべきものは人類及び人類の干與する事象なりとせば、歴史の根本的動機となるべきものも、畢竟するに人類生活の根本的動機と同一ならざるべからず。然るに吾人々類は有史以來常に一の社會を形成し來たれり。斯如き社會の起源が如何なる事實に基きたると、或は又社會の本質が意志の結合たると、各人の協同たると、果た又同類意識たるとを問はず、如何なる個人と雖も此の社會を離れて存在し得るものにあらず。勿論個人を離れたる社會は思考し得ざれども、一方個人が社會を作ると共に、他方社會は個人を作り、相互相離るべからざる關係を有するものなるが故に、如何なる個人と雖も社會の影響を免るゝことを得ず。[6]斯く社會を維持形成するに必要なる條件は必ず一二に止まらざるべしと雖も、其の根本的に絶對に必要なるは各個人の生命の持續なること論を俟たず然るに其の生命の持續に最も必要なるは物質的生活に外ならず。假令世を捨て俗を脱したる聖者と雖も、彼が其の生命を持續せんとする限り、物質的生活より離るゝことを得ざるなり。唯彼

の物質的評價が一般人に比して極めて低しと云ふに過ぎざるのみ。況んや他の物質的欲望の甚だしく過大なる一般人類に於ては、其の關係一層密接にして、其の生存せんと欲求する意志は極めて强く、殆ど原始的本能とも云ふべきなり。從つて其の物質的生活は時に其の靈的生活をも壓迫し去つて、彼等が全生活を支配するに至ること甚だ多し。かく物質的生活は單に一個人の生活を支配するに止らず、引いて更に社會全般の狀態に影響する所亦甚だ大なり。勿論斯如き物質的生活以外に精神的方面例へば宗教的生活の如き、時に其の感情の發露は物質的方面以上に吾人の生活を支配することなきにあらざれども、尙ほ其の常態にありては物質的生活の影響を避くること能はず。吾人は常に斯如き物質的方面の活動、換言すれば經濟的生活に左右せられざるを得ず、こゝに於て社會の變遷即ち社會組織の變動の根本的原因は是を經濟的原因に歸せざるを得ず。[1] 人生の經濟的方面は少くとも歷史の根底に於て有力なる動因たることを否定し得ざるなり。

斯如く考ふる時は他に如何なる理由の存在するにもせよ、人類の歷史を考察するに當つて、換言すれば文化の過程を正當に記錄せんとするには、經濟的原因を閑却しては、充分に是を果たすこと能はず。然らば斯如き經濟的原因は如何なる程度に於て、歷史に影響し、是を支配するものなりや。斯如き歷史觀――經濟的史觀論の價値如何。換言すればこれと文化價値との關係如何。是れ以下論ぜんと欲する所のものなり。

（註一）E. Bernheim:—Einleitung in die Geschichtswissenschaft. (Sammlung Göschen.) s. 1.

（註二）Windelband:—"Geschichte u. Naturwissenschaft." Rickert:—"Kulturwissenschaft u. Naturwissenschaft."等。

（註三）Ch. Seignobos:—"La Méthode Historique appliquée aux Sciences Sociales." p. 2.

（註四）Windleband:—"G. u. N."(Präludien. Dritte Auflage. s. 372 f.)

（註五）拙稿「經濟價値論」(四)「三田學會雜誌」第十三卷第二號）參照

（註六）高田保馬氏「社會學原論」五九頁

（註七）Seligman:—"Economic Interpretation of History." p. 3.(河上博士譯「新史觀」四頁)

## 二

經濟的史觀論の如何なるものかに就ては、すでに上述せる所に依つて略々明かなりと雖も、更に是を具體的に明確にせんと欲す。經濟的史觀論は從來種々なる名稱を以つて稱せられたり即ち唯物史觀 "Materialistic interpretation or historical materialism." 或は佛伊の學者間には經濟的定命主義 "Economic determinism." 等と呼[1]れたりと雖も、セリグマン氏の云へるが如く、經濟的史觀論 "economic interpretation of history." と稱するを以つて最も穩當なる名稱なりと思惟す。[2]

經濟的史觀論の思想は其の起源を必ずしもマルクスに發せしにあらず、是を遠く探れば希臘時代に得ること必ずしも難らずと雖も、斯如きは牽强附會の謗を免れず、恰も近松、シェークスピヤの著作の內に永遠の哲理を求め、彼等の哲學思想を讃美するに似たり。然乍ら近く十八世紀に於て現れたる諸學者、即ち伊のヴィコー、佛のモンテスキュー、獨のヘルデル、英のバックル等の所說の內にはすでに經濟的史觀論の胚種を見ることを得べし。勿論マルクスと雖も是等諸學者に影響さるゝ所少からず。されどマルクスの最も影響されたるは左の四思想なりとす。即（第一）獨逸の古典的觀念論、殊にヘーゲルの辨證哲學、所謂正反合の思想(第二)フォイエルバッハ

の人類學的唯物論、"Der anthropologische Materialismus"（第三）サン、シモンの歴史の經濟的解釋、最後に（第四）ダーヰンの生物進化の說、等なり。[3] 斯如くマルクスの說は先人の說の影響を受くる所極めて多大なりと雖も、彼が最初に一箇の學說として經濟的史觀論を樹立せる功は奪ふべからず。今マルクス自身の說く所を見るに、一八五九年の著「經濟學批判」"Zur Kritik der politischen Oekonomie."の序文に於て其の態度を明かにしたり。[4] 即ち物質的生活の生產方法なるものは社會的政治的及び精神的の生活過程を決定するものなりと云ふにあり。然乍らマルクスに關しては幾多の學者の詳細なる研究あり敢てこゝに再述するの必要を認めず、唯彼の說く所の結論のみを簡單に記述すれば足れり。マルクスの云ふ所を見るに大體二箇に分つことを得るが如し。[5] 即ち（一）歴史上に於ける經濟的要素の重要。河上博士の言を以つてすれば人類の文化に關する經濟的說明。及び（二）社會的變化を經濟的狀態の結果より生ずる階級爭鬪に歸せんとするものにして、河上博士は是を社會組織進化論と名けたり。博士は更に是を二分して社會の生產力と社會組織との間には密接不離の關係あるものなることゝ、社會の生產力の變動に伴うて社會組織も亦必然的に變動すべきものなることゝにせられたれども、こは必ずしも必要なる區分なりと思考し得ず。何となれば博士も云へるが如く「第一の主張は論理上必然的に第二の主張を產む」否寧ろ第一の主張も第二の主張も論理上同一なりと云ふも不可なければなり。

マルクスの說く所を解するに上述する所を以つて誤なしとすれば、從來マルクスに對してなされたる經濟的史觀論の攻擊は往々にして當を失したるが如し。蓋しマルクスの所說は暫々其の說を踏襲する者に依つて餘りに誇張せられたるが故なるべし。スパルゴーの云へるが如くダーヰンの進化論もマルサスの人口論も其の後繼者に依つて餘りに狹義に解釋せられたり。「これ人類に關する學說の免れ得ざる運命なり。」然るに獨りマルクス、エンゲルスの經濟的史觀論のみは之に反して寧ろ誇大せられたるなり。[6]

（註一）J. Spargo: "Socialism." p. 72.

（註二）Seligman:—"Economic Interpretation of History." p. 4.（「新史觀」五頁）

（註三）藤井（健）博士「唯物史觀の解剖其素成分」（「日本社會學院年報」第一年第三冊）

（註四）K. Marx:—"A Contribution to the Critique of Political Economy"（translated by Stone.）pp. 11-13.
河上博士「マルサスの社會主義の理論的體系」（「社會問題の研究」第三冊）に明確なる飜譯紹介あり

（註五）O. D. Skelton:—"Socialism. A Critical Analysis." pp. 102-114. 河上博士同上　二七—二九頁

（註六）Spargo:—前掲 p. 82.

今こゝに如何にマルサスの主張する所が後世に於て誇張されたりや否やに就ては、論ぜずして直ちに然らば斯如き史觀論に對して說へられたる反對論に就て見んと欲す。其の誇張されたりし點に就ては、後に自ら說明する必要あるが故なり。今假りにセリグマン氏の擧ぐる處とマシュース氏が其の著「歴史の精神的解釋」"The Spiritual Interpretation of History."に於て論ぜる諸點とを示して、反對論の一般を代表せしめんと欲す。

セリグマン氏は經濟的史觀論に對する一般の反對論をば五つに區分せり。即ち（第一）經濟的史觀論は定命主義を奉ぜるものにして、自由意志說に反し、偉人の價値を全然無視せるものな

るが故に否なりとするもの。（第二）經濟的史觀論に於ては歴史的法則をば認めたりと雖も、歴史的法則の存在せりや否やは今日尙ほ疑問とする處なるが故に、此の學說は是認することを得ずとするもの。（第三）此の學說は社會主義の臭味を帶びたるが故に否なりとするもの。（第四）此の學說は歴史上に於ける倫理的及び精神的勢力を無視せる故に、誤なりとするもの。最後に（第五）此の學說は誇大に失せりとなすものゝ五なり。[1] 同氏は以上五つの反對說に對して一々詳細に駁論せられたりと雖も、未だ必ずしも充分なりと思考し得ず。且つマシュース氏は「歴史に適用するには經濟的史觀論は單純に失せり」[2]との反對を以つてし、更に氏は人類が性的本能に依つて驅使さるゝ化學的機械以上のあるものなることを說き、進んで是等の事實を具體的に區別して次ぎに述ぶるが如き八つの反對要素を示したり。即ち（一）人類は各々其の人格を有せり歴史は「自然人」「經濟人」若しくは「原始人」の如き抽象的の人類に關するにあらずして、實際的人類――好惡、意志、性格等を有する人類に關するものなり。（二）是に相聯結して經濟的史觀論は餘りに歴史上の偉人の意義を無視せり。（三）習慣に現れたる行爲の內に理想的觀念あり家庭的慣習――例へば我國に於ける三月五月の節句の如き、勿論是に伴ふ經濟的方面ありと雖も、其の經濟的方面を支配する精神的方面あることを閑却することを得ず。（四）且亦種族的誇負若しくは嫉妬の如きは、其の起源すらも全然經濟的或は地理的のものと云ふを得ず。白色人種對黑色人種の問題の如き、乃至は現在講和會議に於ける日本の呈出せる人種的差別撤廢案の提議が容易に各國の認容する所とならざるが如き、勿論其の間に地理的經濟的理由の存せざるには あらず、即ち米國濠洲等の日本に對する經濟的恐怖が有力なる反對原因たりと雖も、全く是と離れて人種的偏見なきにあらず。試みに吾人がアイヌ、生蕃等の如き未開人に對する時を想像せよ。果して何等の人種的偏見なきや否や。（五）親の慈悲、冒險、名譽、遊戯、光榮、等の非經濟的感情、乃至主君若しくは國家に對する忠節の心は時に經濟的法則以上に强力なり。尙ほ社會團體を構成するに力ある摸倣の原則も亦然り。（六）藝術に對する感激の如きは、或は地理的に經濟的に制限せらるゝことあるべしと雖も、それ以上のあるもの其の中に存せり。（七）歴史は道德宗敎等に存する理想若しくは信仰の事實に滿てり。例へば十字軍、宗敎改革の如き單に經濟的原因を以つてのみ解釋することを得ざるものなり。最後に（八）すべての經濟的史觀論は吾人の自覺的意思 concious motives が其の起源の如何に關せず、斯如き起源とは全く離れて作用する事實を過看せり。こは經驗的事實なるが故にこれを經濟的起源に歸することを得べしと雖も、斯如く起源に依つて活力 vital forces を測定せんと欲するは恰も單一なる公式のためにものゝ發達を無視するが如く、理論的興味のために歴史を非人格視するが如し。[3]

マシュース氏は以上簡單に解說せる所の八つの歴史上に現れたる人格的要素を擧げ、精神的要素を認識する必要を說きたり。勿論氏と雖も是等精神的解釋の制限を認めざるにはあらず。されど氏は一般的に歴史上の事實の精神的影響を說明したる後、社會的進化を研究し三つの傾向を擧げて、精神的方面を力說せり。即ち（一）外的權力に訴へしものも、次第に內的許否の思想に代りたること、換言すれば外形的權力の支配に基かずして、內的の道德力に依れる如くな

りたること。（二）個人の人格的價値を一層認むるに至りたること。（三）權利 rights のための爭鬪も次第に正義 justice のために變りたる等の傾向を擧げたり。[4] 氏は詳細に是等に就て一々論述し、更に精神的價値の必要なる所以を力說し、社會的秩序に於ては單に經濟的欲望の滿足に向つて働く力以上のあるもの存在し、經濟的史觀論のみに依つて眞の人生の力及び傾向を思察せんことは、不可能なることを述べたり。[5] 氏の思索は極めて基督敎的色彩を帶びたる點なきにあらざれども、亦一部の歷史觀を代表するものなり。こゝに興味あるはセリグマン氏は經濟的史觀論を考察肯定せんとして、精神的史觀を許容し、マシュース氏は精神的史觀論を肯定せんとして、經濟的史觀を其の根底に同じく認容したること是なり。マシュース氏曰く、「吾人は唯一の史觀のみにては不可なることを發見せり。少くとも二つの史觀を必要とす。一は非人格的にして、地理的經濟的勢力の作用を含むもの。他の一は人格的のものなり。[6]」と。又セリグマン氏も亦「歷史あつて以來の人類の精神的勢力の及べる諸現象のすべてを、經濟要素の研究のみを以つて、充分明白に說明せんとするは否なり。[7]」と云へり、兩氏各々其の立脚地を異にしたりと雖も結局に於ては略々同一なりと云ふを得べし。

然らば如何なる程度に於て、精神的史觀論と經濟的史觀論と相關係するものなりや。上述せる經濟的史觀論に反對する諸說と經濟的史觀論そのものとの關係を明白にして、先づ經濟的史觀論の限界を明瞭にせんと欲す。然る時は以上述べたる所を一括して次の五問題となし、是を解決せば略々充分なりと思惟す。

第一、經濟的史觀論と人種學的感情との關係如何。種族的僻見に關する問題、及び人格を無視せりとの攻擊に對して、一に解釋を與ふることを得べし。

第二、經濟的史觀論と生物學的感情との關係如何。これ亦種族的僻見に對する他の見方よりせる解釋を與ふると共に、親的愛、名譽、冒險遊戲等に關する問題を解決し得べく、更に藝術に關する一部の見方をも示し得べし。

第三、經濟的史觀論と社會主義との關係如何

第四、歷史的法則の問題と經濟的史觀論との關係如何。合せて經濟的史觀論が定命主義なるや否やをも解決し得べし。

第五、經濟的史觀論と精神的方面との關係如何。こゝに云ふ精神的方面には個人の人格、宗敎上の信仰、理想、及び藝術的憧憬を含む、合せて歷史上の偉人を經濟的史觀論は果して無視せりや否やに就ても論ずべし。

以上五ヶ條の關係を明白にせば、自ら經濟的史觀論が誇大に失せりや否や、及び同史觀は餘りに單純なりや否やの問題をも明かになすことを得べし。續いて物質對精神の歷史的傾向を觀察すれば、マルクスの說へたる經濟的史觀論が果して如何なる程度に於て眞なりや否や、即ち斯論の價値及び限界を明かになし得ると信ず。これ敢て是等の問題に關して以下一々論ぜんと欲する所以なり。

（註一）Seligman:—"Economic Interpretation of History." pp. 89—90.（河上博士譯八九—九〇頁）

（註二）Masthews:—"Spiritual Interpretation of History." (1917) p. 21

（註三）ditto. pp. 26-30.

（註四）ditto. pp. 67-68.

（註五）ditto. pp. 217-8.

（註六）ditto. p. 188.

（註七）Seligman:-op. cit. p. 156.（譯書、一五七頁）

（未完）